

209) あなたのいない海

いつかあなたとドライブに来た 千倉^{ちくら}の海にまたやってきた
あの日も今日も木もれ陽たちは テラスの上でワルツを踊り
夏^{はら}を孕んだ南の風は 潮の香を届けてくれる
海はあの日と変わらないけど 海をまとったあなたはいない

駐車場にはクルマがあふれ マリンブルーの海が広がる
カモメ飛び交い人愛し合い わたしひとりが取り残された
肌をつきさす夏^{ひざ}の陽射しと 髪に集まる浜辺の風が
メランコリーなわたしの心 満たしてくれる今日の道連れ

ブレーキランプ^{まち}街まで続き や^や灼けた歩道を歩いたあの日
恋の予感にちょっと震えて あなたのシャツの裾をつまんだ
今同じ道ひとりで歩く いいつくせない寂しさ抱いて
海に帰ったあの日の恋は もう帰らない夏^{おもいで}の追憶

思い出したら涙になると 海の景色を避けてきたけど
^{しおさい}潮騒の音心にとどめ 今のわたしはしばし旅人
夕映えせまる海に向かって あなたの名前^{さけ}叫んでみれば
あの日の恋がわたしの中を 嵐のように走り抜けてく